近世中期の漢学者と和学者の関係

――野村東皐・江村北海・荒木田麗女――

時田　紗緒里

荒木田麗女（享保一七年（一七三二）～文化三年（一八〇六））は伊勢神宮権禰宜を父に持ち、後に伊勢神宮外宮御師の妻となった。平安時代を舞台とした物語作品や連歌で知られ、その事跡から宣長を中心とする国学者との比較を以て論じられてきた人物であるが、麗女は国学者とは一線を画し、漢学者と多く交流を持っていた。麗女と漢学の関わりについては、伊豆野タツ氏「荒木田麗女の学問と素養―物語作品を通じて見た―」[1]にすでに示される。伊豆野氏は、漢学を物語執筆に活かされる教養として捉えて整理された。さらに、雲岡梓氏が『荒木田麗女の研究』[2]第四部第二章「麗女の漢詩」の項で麗女の漢詩人としての面に着目して事跡についてまとめられたことからも、麗女と漢学との関わりを知ることができる。

麗女は明和八年（一七七一）に、後醍醐天皇から後陽成天皇までの御代を描いた『池の藻屑』、同年安徳天皇・高倉天皇の御代を描いた『月のゆくへ』という歴史物語を執筆している。鏡ものに倣いかな文字で書かれた歴史物語は、麗女の事跡としては和学に分類され、当時から高い評価を得ていた。このことが麗女が国学との関わりから論じられる大きな要因であるのだが、ここで注目したいのは両作品の序文が『池の藻屑』は江村北海、『月のゆくへ』は野村東皐により付され、双方漢学者の手によるものということである。

江村北海（正徳三（一七一三）～天明八（一七八八））は朱子学派の儒者で、福井藩の儒者伊藤龍洲の子である。宮津藩儒として経史を講じたが、のち京都に隠棲して詩作に専念した。

野村東皐（享保二年（一七一七）～天明四年（一七八四））は、彦根藩主井伊直幸に認められ藩儒を務めた、蘐園学派の漢学者である。姓は野、名は公台、字は子賤、通称は信左衛門。新左衛門。号は東皐、蘐園。服部南郭に入門し漢詩を能くしたことで知られる。

北海も東皐も、作品の権威付けとしては十分な人物ではあるかもしれないが、歴史物語という作品の性質を鑑みるとふさわしいとは言い難いように思われる。東皐自身も、『月のゆくへ』序文で「嗟余素より史学に暗く、国籍を諳せず、則ち又何を以て能く一辞を賛せんや。」と述べる所である。しかしながら、麗女が選んだのは漢学者であった。この事実について、真淵・宣長国学との関係を離れ、東皐と北海、そして麗女三者の関係から考えて見たい。

まず、東皐『月のゆくへ』序文と北海『池の藻屑』序文とを比較し、麗女と作品に対する評価を確認する。

なお、『月のゆくへ』『池の藻屑』共に原文は漢文、引用は近藤瓶

氏城校『史籍集覧』[3]五十九巻所収『月のゆくへ』『池の藻屑』に拠った。旧字・異体字を通行字体に適宜改め、返り点・送り仮名、書き下しは筆者による。

『月のゆくへ』『池の藻屑』は、史実を扱った作品であるため、東皐・北海の歴史観がそれぞれ述べられている。

『池の藻屑』の北海序では、「何をか実と謂ふや。歴代の正史の如き、是なり。何を虚と謂ふや、野史小説の如き是なり」としていて、「正史」を「実」、「野史小説」を「虚」とする。東皐は、歴史を題材とした作品を「国史亡びて稗官作り、稗官降りて野史出づ」とし、「国史」「稗官小説」「野史」の三つに分類する。「正史」とは、勅撰の歴史書のことで、六国史と呼ばれる『日本書紀』・『続日本紀』・『日本後紀』・『続日本後紀』・『日本文徳天皇実録』・『日本三代実録』、もしくはそれに準ずる公のものを指すと考えられ、北海の述べる「正史」と東皐が述べる「国史」とは同一と見て良いだろう。

さらに『池の藻屑』北海序は、「正史」以外のもの全てを「野史小説」と定める。対する東皐が「野史」とするのは、「野史の如きに至りては、則ち杜撰無稽、其の濫已に甚しく、冗套一轍、愈々下、愈々鄙なり、なんぞ観るに足らんや。」とする、史書として作られたが故意か過失かを問わず誤りの多いものか、歴史の要素を含むが娯楽性を重視したものである。

東皐の序では「稗官小説」は、

それ稗官小説の書は、方言俗語細かに従ひて大を遺れ、務めて情事を摸し、動もすれば淫褻に渉れば、以て訓ふべからず。然れども宮壷の隠秘、君相の忌憚、往々にして其書に散見し、実に少なからずとなす。しかして中古の風俗、歴世の盛衰、亦縁て以て一二を考ふべし。今其れ諸鏡諸語の属、其の記載する所、大体に関係有るもの鮮し。然れども亦或は以て史の闕文を補ふべし。故に文献不足すと雖も、猶ほ徴に足る者是に於いて存す。取ること勿れと欲すと雖も、君子其の諸を舎し、則ち古を稽し世を論ずる者は、以て読まざるべからず

と私撰の歴史書のこととするが、「諸鏡諸語」として四鏡やそれに類するものや、物語類までを広く言う。「月のゆくへ」は、鏡ものに倣って作られているので、「稗官小説」に分類できる。東皐は、「稗官小説」が中古の風俗を伝え、宮中に関する公にはならないことを伝えることが可能で、歴史書的価値を見出せると指摘し、東皐が述べる所の「稗官小説」と「野史」との違いは、歴史書としての価値があるか否かにあることを示している。

北海は、「野史小説」について「史の欠文を補ふ」ものを評価する。『栄華物語』から『宇治拾遺集』や『源氏物語』、『大鏡』を始めとする歴史物語までひっくるめてその価値を見出すが、特に四鏡を仮名で書かれた作品の中でも正しく歴史を伝えるものとし、『池の藻屑』について「謂可し四鏡之書、此を併せて五と為すも、豈奇歎激賞せざる可けんや」と述べる。

東皐は、『月のゆくへ』の作品評価を、「史学を裨助するに足れり」としており、東皐の述べる所の「稗官小説」として、野史とは一線を画す評価を下している。

このように、北海と東皐とは同じような歴史観を持ち、それぞれ麗女の歴史物語を高く評価しているのだが、面白いのは麗女の評価

に対する違いである。

北海は、『池の藻屑』序文において麗女の人物像を「紐を組み裁縫は百爾女工、精妙ならざるなし。」と、述べていて、朱子学的な女性像、すなわち良妻賢母を理想とする女性観に基づく評価を下していることが分かる。

対して東皐は、麗女について東皐は「清渚は素より彤管の才有り。」と評する。「彤管」とは、軸が朱塗りの筆のことで中国では古来後宮の記録をする記録官の女性を置き、「女史」と称していた。唐代に、女史の一つに女史が彤管を用いたことから「彤史」という官が存在していて[5]、そこから東皐は「彤管の才」を歴史物語を書く才能という意味合いで使用する。同時に、中国においては女性が正式な官として歴史を叙述することを示唆するものであろう。

序文の執筆動機については、北海は荒木田氏の筆硯の余波及び詞詩は、余に正を請ふ。故を以て池の藻屑の序は余辞するを得ず」と述べていて、北海が麗女の漢詩の師であり、学問上の師であるために序文執筆に至ったことが分かる。

では、ここで改めて北海と麗女との関係を確認したい。

『慶徳麗女遺稿』[6]によると、麗女は幼少の頃から漢学に親しんだが、本格に始めたのは三七才（明和三年（一七六八））の時である。夫に勧めで共に上洛し、江村北海（正徳三年十月八日（一七一三年）～天明八年（一七八八））の門で漢詩を学び始めた。

北海への弟子入りについて麗女は『慶徳麗女遺稿』に、

詩をも作るべく良人すゝめらるれど、是は才力なくて、いとかたきことにしけるを、しひて催さるゝも詮方なし。をりしも姪興正が京に遊学しけるをたよりに、江村北海先生の門に入りしも、はか〴〵しくもえせねことゆゑ恥ずかしく思ひたり。

と記す。しかしながら、北海は『『日本詩史』[7]において、

伊勢山田の祀官の婦、荒木田氏、読書を好み、和歌連歌を善くす。近頃詩を作ることを学ぶ。間佳篇有り。婉順にして閨閤の本色を失はず

と麗女の漢詩を高く評価する。北海は、大阪の片山北海、江戸の入江北海とで、「三都の三北海」と称されたほどの漢詩人であり[8]、その北海にまだ弟子入りしてさほど経たないにも関わらず評価を得ていることは、麗女の漢詩の実力は一定水準以上と推察される。また、北海は麗女に「紫山」の号を送っている。

北海の『日本詩史』による紹介を契機として、自然麗女の漢詩は知られるようになったものか、漢詩人との交流が多く見られるようになる。その様子は、『初午の日記』に見ることができる。

安永六年（一七七七）の旅に二月九日から六十八日間、麗女と夫家雅は従者と共に、現在の滋賀・京都・大阪・奈良・和歌山・兵庫を巡った。各地の名所を訪れてその様子を歌に詠んだり、文人を訪ね交流した。『初午の日記』について、雲岡梓氏「荒木田麗女の紀行文『初午の日記』『後午の日記』の道程」[9]により、その旅の道程と面会者、道中で詠まれた和歌・漢詩等の一覧の表が示された。名が挙がる文人は二十六名で、そのうち詳細不明の五名を除いた十四名が漢学者である。『初午の日記』の旅は漢学者との交流も目的の

一つであったと考えられる。

この旅行時、二月十八日京に到着した折、江村北海は播磨に向かっていて留守だったらしい。北海の息子清田龍川が「爰にあるべう」と言ってもてなしてくれたので、居心地の良い滞在になったという。龍川は、江村北海の三男。北海の弟で叔父に当たる清田文興の養子となった人物である[10]。

『池の藻屑』は明和八（一七七一）年二月二月に成立し、北海の序は安永三年（一七七四）九月に成立している。こうして見ると、安永三年以前に麗女が『池の藻屑』序文を依頼する人物として、自らの師に権威付けのために選ぶとすれば、北海は妥当であったと言えよう。

一方で、麗女と東皐の交流は、『慶徳麗女遺稿』にもその様子が書かれるものの、いつ頃から麗女との交流が始まったのかは判然としない。

『月のゆくへ』の成立は明和八年八月十五日で、東皐は安永八年（一七七九）九月に『月のゆくへ』の序文を書いている。『月のゆくへ』序文にはまず「頃者其良人如松、清渚著す所の『月之行邊』を繕写し、諸余の草堂に至る、曽簡に於いて弁一言を乞う。」と、『月のゆくへ』の序文依頼が麗女の夫家雅を通じて行われたもので、『月のゆくへ』を送り、書簡で序文を依頼したことが書かれている。また、

往歳相ひ携へ、西の五畿間に遊び、湖中を迂道し、草堂顧問す。余は乃ち之と相識を得る。時已に弁言の託有り。余敢て当せずと雖も、心窃に既に之を許せり。爾来数歳、書問往復し、情誼益厚し。屡清渚之業寓目するを得る。

との記載から、書簡での依頼時には家雅・麗女共に東皐と直接対面したことがなく、対面してから手紙をやり取りして交流を持つようになったことが分かる。これは逆に言えば、面会以前には麗女と東皐とは、個人的な交流がなかったということを示す。麗女が東皐に序文を依頼したのは、『月のゆくへ』成立以降安永八年までとなるが、全く交流のなかった両者が初めて対面しているのが安永六年、それ以前に序文執筆依頼を手紙で行ったとすると、東皐の目立つ業績として安永五年に『大石良雄復君讐論』を刊行していることがあり、これを麗女が目にして『月のゆくへ』との何らかの思想的共通性を見出したために序文依頼に至ったのではないかとの推測が成り立つ。

『大石良雄復君讐論』は、主君浅野内匠頭長矩の恥辱をそそぐため、その家臣達四十七人が結束して吉良上野介義央を討った、赤穂事件に関する論である。この事件は、元禄十四年（一七〇一）三月十四日、勅使接待役の浅野内匠頭が突然吉良上野介に江戸城松の廊下で切りつけ、失敗。浅野は切腹、城地没収の上絶家の判決を受けた第一の事件と、結果、赤穂藩は解体して藩士は全て浪人となり、そのうちの四十七人が翌十五年十二月十四日から十五日にかけて、吉良邸を襲撃し、主君の敵を討つという第二の事件をまとめて「赤穂事件」と総称する。

赤穂事件については、多くの儒者がそれぞれの立場から論を展開していて、『大石良雄復君讐論』は東皐の儒者としての立場を表明するものと見ることが出来よう。

『大石良雄復君讐論』の主要な論旨は、以下の通りである[11]。

①乃赤穂候之死、是死於法也、是非死於讐也。
（乃ち赤穂候之死、是法において死す、是讐により死するにあらざるなり。）

②夫良雄等亦知法之不可讐、而不知義央亦不可讐、一唯以伸君憤為忠、而不与共戴天為義、殊不知不共戴天之義、応有所拠、而伸君憤、即成君私也。
（夫れ良雄等亦法の讐たるべからずを知りて義央亦讐べからざるを知らず、一に唯だ君の憤を伸ばすを以て忠と為して、共に天を戴かざることを義と為す、殊に知らず共に天戴かざる義、拠る所有るに応じて、君の憤を伸ばす、即ち君の私を成すなり。）

③君子之所謂忠也者、協義之謂也、苟不協義、豈足為忠乎。（中略）且守者為君守民者也、欲全己忠而害所守、小人之事、而非君子之所謂忠也。故上不逆公法、中不失臣道、下不損民命、然後可謂忠矣。
（君子の所謂忠は、義に協ふを謂ふなり。苟しくも不義に協はざるもの、豈に忠と為すに足らんや。（中略）且つ守は君と為し民を守る者なり、己の忠を全うせんことを欲して守る所の害、小人の事にして、君子之の所謂忠に非ざるなり。故に上公法に逆はず、中臣道を失はず、下民命損はず、然る後に忠と謂うべし。）

※返り点・送り仮名・書き下しは筆者による。適宜異体字・旧字は通行のものに改めた。

東皐は、浅野内匠頭について処刑を免れない罪を犯したと述べる。死は自らが招いたことであって、吉良や幕府といった仇によって死んだのではないと主張する。また、大石ら赤穂浪士は、法によって吉良が仇に当たらず復讐すべきではないと知りながら、主の私憤を晴らすことを義として、吉良を殺すことを義と定めた。では、義とは何なのか。そもそも、浅野がすべきことは、君主として民を守ることである。よって、浅野は法を守り、大石ら赤穂浪士は臣道を守って、民の命が損なわれることがない、これこそが義であると東皐は述べるのである。この義があって忠が語られるべきで、己の忠を全うするために主君の命を守るのは害でしかないとする。

東皐の主張で注目すべきは、大石ら家臣に浅野に従う必要はなかったとする点である。そもそも、全く浅野の命に従うのであれば、城を明け渡す際に全員死ななければならなかった。だが、浅野は本来赤穂藩主として領民を守る事が仕事なのだから、家臣達はそれを引き継ぐべきであると考える。よって、自死も仇討ちも推奨しない。幕府も吉良も復讐する相手ではなく、強いていうなら浅野が恨むべき対象だが、主君であり死んでいるのだから仇ともならない。東皐の理論から言えば、赤穂浪士達には仇が存在しない。

さて、『月のゆくへ』はどうだろうか。『月のゆくへ』における建礼門院の主君は、本来ならば高倉天皇もしくは高倉天皇が該当する。しかし、高倉天皇は病死してしまうので、安徳天皇有する平家が仕えるべき主君と見ることが出来よう。平家にとっての仇は源氏であり、原因をつくった後白河上皇でもあるので、建礼門院の仇として

考えられるのは源氏と後白河上皇が挙げられようか。

『月のゆくへ』において、直接的な仇である源氏に対する建礼門院の心情が窺える描写は『月のゆくへ』に一切ない。

平家滅亡後、建礼門院は生き残り後白河法皇と対面する場面が描かれる。

後には大原の奥なる寂光院に入らせ給ひ、御ぐしおろして静かに行はせ給ふ。先帝の浅ましかりし御宿世を、物うく悲しき事に思ひて、後の世の闇路のひかりなるばかり、まめやかに佛の道をのみなむ、願はせ給ひ、まぎるゝ方なく、つとめさせ給へる、いと尊き御様に侍り。（中略）後には昔の心よせなる人も、とぶらひ参り、一院さへおとづれ聞えさせ給へり

この場面は、「大原御幸」として知られる場面で、平家物語諸本には後白河を恨む描写が為されるものもある。しかし、『月のゆくへ』では「昔の心よせなる人」と建礼門院右京大夫と並べ、「一院さへ」訪れると書く。これは、建礼門院が落ちぶれてなお後白河院が訪れるほどの人物であると示すための描写であるように思われ、少なくとも建礼門院から後白河院への恨みは読み取れない。『大石良雄復君讐論』と同じく、「月のゆくへ」には建礼門院にとっての仇が存在しないように描かれている。

では、『月のゆくへ』における悪とは何か。

高倉天皇の描写の特徴的な部分を挙げると、

・春日のしなひもながく栄ゆる春にあひ、源の清き派の末ひろごりて、数そふ星の位の光も曇りなき御代とて、帝のきびはに坐す程も、世の中うしろめたからず。上りての世にも恥ぢぬ様なり。

・あけむ年は上御冠の事あるべしとて、さやうの御まうけとぞ聞えし。（中略）十一にならせたまへど、いみじうおとなびさせ給ひ、御容もまほにめでたう、御心ばへもなつかしうおはします。（中略）院も女院もめづらしう待ち見奉らせ給ひ、あげおとりだにせさせ給はず、いとゞしうなまめかしさそひて、あてにけだかき御様を、限りなう御覧じて、かつはゆゝしうさへ思召されて、御涙も忍びかねさせ給へり。

・上わかうおはしませど、お心ばへめでたく、道々のざえかしこく物せさせ給ひ、文のかたをも、殊にこのましうせさせ給へば、君達も心ばみ給へる多く、古き博士どもも時にあひつゝ、おほやけわたくし、優なる遊び繁く…

・上はこと物よりも、笛をのみなむ、いみじきものにせさせ給ひ、御心入れさせ給へば、常にめでたき音に吹かせ給ふ。

・上は又歌をも好ませ給ひ、をりふしによませ給へるも多く侍り。

その容姿や資質を賞賛し、特に学問や芸術に秀でた人物として描く。

また、高倉天皇が病死した際の描写は、

同じ帝と聞ゆれど、御心ばへの殊にありがたう物せさせ給ひ、民を育くませ給ふ御心のあまねさは、昔の聖の帝のためしに劣らせ給はず、山嵐の寒き夜は、片田舎の賤の住家を、はるかに思召しやらせ給ひ、竈の煙の立ちそふ朝は、国民の豊かなるをよろこばせ給ひ、人を憐れませたまふ御心ふかう坐せば、男も女も仕うまつりよくて、萬代とのみ祈り聞えさせしに、（中略）末の代にはあまるばかりの御心のめでたさを、天が下こぞりて惜しみ奉らぬはなし。

とあって、為政者としての麗女の理想像を高倉天皇が担っていることが窺えるのである。一方の後白河院の描写は、

高雄寺の文覚といへる聖参りて、用意なくみだりがはしきふるまひ仕うまつりにければ、院心なしとむつからせ給ひ、北面の人々して、搦めさせ給ひ、伊豆国に流しつかはされき。

と、自らの意のままにならないことで、個人的に武力を行使する描写が見られる。その後白河院もまた、平家に武力によって征服される。

入道、宗盛の大納言を、法住寺に参らせて、院をさへむかへ奉り、鳥羽殿におしこめ奉る。（中略）院のうへはさらにうつゝとも思召されず、唯あきれさせ給へる御様なりけるが、日頃になりぬるまゝに、いとゞしう浅ましく思召されて、御涙におぼられてのみ過ごさせたまふ。

高倉院が死して後は、後白河院と平家の溝は深まり、後白河院は源氏の武力で平家と争う。源氏の義仲の力で平家を京から追い出した後白河院だが、今度は義仲に脅かされる。

もとよりさる片田舎に生い立ちし者なりければ、ひたぶるに夷心にて、かたくなしき事のみなりしが、はては院のおはします法住寺殿に参り、いといたくみだりがはしきふるまひどもをしつゝ、やんごとなき御方々の、そこなはれさせ給へるもかたじけなく、上人北面の侍どもなどは、数もなう失はれけり。御殿に火をさへさして、むくつけき事いふ限りなし。（中略）平家の人々のあくがれ出でにしをりにも、やゝたちまさりたるらうがはしさの、めどらかなるまでに侍り。

ようやく宮中が落ち着くのは、義経が義仲を討って後である。すでに武力をより大きな武力で抑える他なく、徳の力で世を治めるという麗女が理想とする高倉天皇の御代の様相は、見る影もない。

『大石良雄復君讐論』と『月のゆくへ』を比較してみると、建礼門院と大石ら赤穂浪士、平家と浅野、源氏と吉良、後白河法皇と幕府が似た立場にあり、その構造が非常に似通っていることが分かる。仇とは何か、悪とは何か、と考えたときに両者共に仇は存在せず、悪は武力と見る。つまり、悪は人ではなく、武力を行使したことなのである。麗女はこのような共通点から、建礼門院を肯定的に評価した『月のゆくへ』を東皐が理解してくれるものと判断して、序文執筆依頼に至った。麗女の意に適う序文執筆が可能な人物が周囲にいなかったとも考えられよう。

東皐の思想の特殊性は、東皐が老子の思想に影響されている事によると推察される。東皐は、太宰春台『老子特解』の序文を書いており、老子の思想について肯定的であったためである。『老子特解』は、二巻二冊から成る老子の注釈書で天明三年に刊行された。第一巻の三一章までは太宰春台が執筆し、以降は春台が病に倒れたため、宮田子亮が後を継いで完成させている。特徴として、従来の老子の注釈者によらない独自の注を目指したことがある。

東皐は、その春台の意志を継ぎ、儒教を学ぶ者には老子を学ぶ必要があるとの考えを序文で表明している。

・世之学老子者、則詘儒学。是不知老聃之心也。儒学亦詘老子、是不知孔子之心也。

（世の老子を学ぶ者は、則ち儒学を詘く。是老聃の心を知らず。儒学亦老子を詘く、是孔子の心を知らず。）

・支聖人之道猶五教也、諸子百家猶醫薬也。人有痊病則不得不用醫薬是。然諸子百家、通於救世。（略）而知聖人必有所於老聃学。

（聖人の道を支うること猶ほ五教のごとくなり、諸子百家は猶ほ醫薬のごとし。人病を痊すること有れば、則ち醫薬を用いざること得ず、是なり。然ば諸子百家は、世を救うことに通ず。（略）しこうして聖人を知るに必ず老聃に学ぶ所有り。）

※原漢文、今治河野美術館蔵本より抜粋。

※返り点・送り仮名、書き下しは筆者による。

中野三敏氏は、儒者と老荘思想の関係について、特に近世中期における老荘思想の隆盛について以下のように述べられている。

・かかる機運を興起した張本として我々の頭に浮かぶのは、荻生徂徠を盟主とする護園の儒者たちであるが、…（略）その周辺の儒者によってその大半が著されている事で、この推定が確実なものとなる。

・元来儒者にして老荘を説く者は殆どが儒老、仏老、或るいは易老の一致を説く者が多く、未だ老子一道の説を打ち立てた者は少ないのだが、それを強力に主張したのが春台と、その弟子で浜松の儒医として有名だった渡辺蒙庵である。

この流れのなかに、春台に続き東皐が組み込まれることになろう。麗女は『月のゆくへ』の序文を交流のなかったにも関わらず東皐に依頼した。東皐でならなければならなかった必然性は、東皐に存在する老子の思想の肯定にあったのではないか。

以上、麗女の歴史物語『月のゆくへ』『池の藻屑』序文を漢学者が執筆していることを通して、和学者と漢学者との関係を考察した。

江村北海は、『池の藻屑』の序文を麗女の師という立場から執筆し、麗女を高く評価し、歴史物語を書くという意義を認めている。野村東皐は、その思想の共通性から麗女に序文を依頼され、『月のゆくへ』自体を高く評価すると共に、『月のゆくへ』序文を契機として、交流するに足る人物として認めたのであった。

近世中期においては、様々な思想が存在し、互いに影響し合っていた。また、同じ漢学者といえど思想には違いが見られ、関係性にも表れる。思想や流派を越えた交流は、近世中期の複雑かつ豊かな学問の様相を示すものである。

注

(1) 伊豆野タツ氏「荒木田麗女の学問と素養―物語作品を通じて見た―」（『実践女子大学文学部紀要』十一、一九六六年九月）

(2) 雲岡梓氏『荒木田麗女の研究』（和泉書院、二〇一七年）

(3) 近藤活版所、一八八四年。

(4) 『月のゆくへ』本文は、神宮文庫本系統の、盛岡中央公民館蔵『月のゆくへ』（御巫清直蔵の、文化十四年十月六日奏光基の手による写本の写本を再写）。

(5) 加藤周一氏編『改訂新版 世界大百科事典』（平凡社、二〇〇七年）参考。

(6) 大川茂雄・南茂樹編『国学者伝記集成』第一巻（国本出版社、一九三四年）所収。

(7) 清水茂氏、揖斐高氏、大谷雅夫氏校注『新日本古典文学大系六十五巻』所収『日本詩史』によった。

(8) 西沢道寛氏訳註、江村北海『日本詩史』解題（岩波文庫、一九四一年）

(9) 雲岡梓氏「荒木田麗女の紀行文『初午の日記』『後午の日記』の道程」（『人文論究』六十四号（一）二〇一四年五月）

(10) 『国書人名辞典』第二巻（岩波書店、一九九五年）

(11) 鍋田晶山氏編、国書刊行会補『赤穂義人纂書』（国書刊行会 一九一一年）。書き下しは筆者による。

受贈雑誌（二）

學習院大學國語國文學會誌
學習院大學大學院日本語日本文學
學大国文
學燈
金沢大学国語国文
かほよとり
岐阜聖徳学園大学国語国文学
京都教育大学国文学会誌
京都大学國文學論叢
キリスト教文学研究
金城日本語日本文化
近代
群馬県立女子大学国文学研究
クロノス
藝文研究
言語表現研究
言語教育研究
言語文化研究

學習院大學國語國文學會
學習院大学大学院人文科学研究科日本語日本文学専攻
大阪教育大学国語教育講座・日本・アジア言語文化
丸善
金沢大学国語国文学会
日本語日本文学専攻院生研究会
岐阜聖徳学園大学国語国文学会
京都教育大学国文学会
京都大学大学院文学研究科国語学国文学研究室
日本キリスト教文学会
金城学院大学日本語日本文化学会
神戸大学「近代」発行会
群馬県立女子大学国語国文学会
京都橘大学女性歴史文化研究所
慶應義塾大学芸文学会
兵庫教育大学言語表現学会
拓殖大学大学院言語教育研究科
聖徳大学大学院言語文化学会